



同志社京田辺会堂光館 (HIKARI-KAN)
ラウンジ展示第 18 期展
「新島襄と同志社—建学の精神・創立者の夢—」



〔開催概要〕

同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第18期展
「新島襄と同志社—建学の精神・創立者の夢—」

会期：2023年10月2日～2024年3月下旬

会場：同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）ラウンジ（同志社大学京田辺キャンパス）

主催：同志社大学キリスト教文化センター

協力：同志社大学同志社社史資料センター

表紙資料：油彩画「ラットランド演説」1960年代

ごあいさつ

ようこそ、光館（HIKARI-KAN）ラウンジ第18期展示へお越しくださいました。

光館では2015年3月の献堂以来、新島襄や同志社の歴史、また建学の精神に関する展示を行っております。今回は「新島襄と同志社」がテーマです。アメリカでキリスト教の本質に触れ、キリスト者となり、牧師になった新島は、帰国後、日本の社会を改良すべく、伝道を行うとともに、キリスト教に基づく学校、同志社英学校を設立しました。その創設期の資料や写真を通して、同志社設立に込めた創立者の夢と、その表れである建学の精神に思いを馳せていただければと思います。

歴史と伝統の町・京都にキリスト教の学校を創るのは、容易なことではありませんでした。文部省から宣教師雇入れの認可を得たものの、キリシタン禁制の高札撤廃から2年とたたない京都の町で、仏教界からの厳しい反対に会い、京都府には校内で聖書授業を行わないとの誓約をさせられ、ハード面でもソフト面でも新島が理想としたアメリカのキリスト教学校のありようを最初から実現することはできませんでした。

今回の展示の中には、当時の困難に関わるものがあります。たとえば、若き日の山本八重の姿が見られますが、彼女は新島との婚約後に府立女学校を解雇されます。また、校内で聖書を教えられなかったため、「校外」に準備された「三十番教室」、テイラーやラーネットなど、なかなか認可が下りなかった外国人教師（「外国人教師一覧」）、校内での聖書授業が府の役人に見つかった際に新島が提出した弁明書（「御受」）など、創設期の同志社が経験した苦労や苦悩を彷彿とさせます。

そのような中で、新島や山本覚馬、外国人教師、そして熊本バンドをはじめとする学生たちの努力により、同志社英学校は念願のキリスト教教育を形作っていくことができました。開校4年後には第一期卒業生を輩出し、その半数はキリスト教の伝道者、キリスト教学校の教師として、歴史に大きな足跡を残しました。

施設の面でも徐々に基礎固めが進められ、今出川校地における専用校舎（寮2棟と食堂を含む）、礼拝堂や書籍館（現有終館）等の建設、さらには同志社女学校の開校や同志社病院・京都看護婦学校の開設にまで至ります。

この同志社でキリスト教教育を行おうとした新島の夢は、彼の残した言葉と行為を通して、建学の精神として伝えられ、受け継がれてきました。「聖書」に拠りつつ発言し、行動した彼の足跡を「自責の杖」や「遺言」、そして今日におけるキリスト教教育の活動の中に感じていただければと願っております。

キリスト教文化センター所長

村上みか

2023年10月

目次

ごあいさつ	1
展示テーマ「同志社英学校開校」	3
展示テーマ「新島襄と同志社」	13
資料リスト・使用写真リスト	23

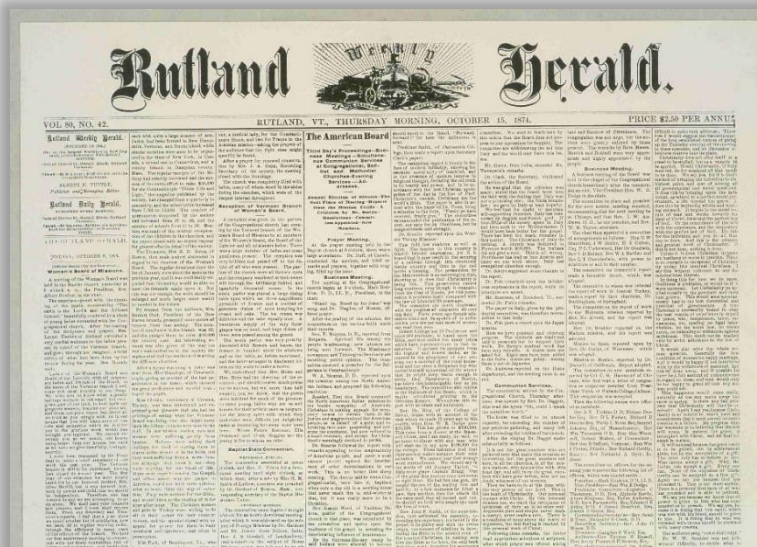
[凡例]

- 一、本パンフレットは、同志社京田辺会堂光館ラウンジを会場として、2023年10月2日から2024年3月下旬まで開催する同志社京田辺会堂光館ラウンジ展示第18期展「新島襄と同志社—建学の精神・創立者の夢—」（主催／同志社大学キリスト教文化センター、協力／同志社大学同志社社史資料センター）の解説付き簡易冊子である。
- 一、展示資料解説においては、冒頭に資料名、年代などの基本情報を可能な限りこの順に記した。なお、複製資料にはその旨を明記し、また、年代については特定可能な範囲で記し、書簡及び日付の記載が重要と認められる資料について適宜月日を記載した。
- 一、ポスターパネル資料写真においては、本文中には写真名のみを記した。
- 一、全ての資料及び写真に関して、現在判明している情報は「資料リスト」及び「使用写真リスト」に記載した。
- 一、年月日表記は、新島襄の慣例に習い、新島が太陽暦を用い始めた1865年（慶応元）1月30日以降については太陽暦を用いる。この日以前は、太陰暦を用いる。
- 一、新島襄の名前の表記については、便宜上、誕生から密出国後アメリカに到着し、フィリップス・アカデミーに入学するまで（1843年2月12日～1865年10月30日）は新島七五三太（ただし、諱を使用しているときは新島敬幹）、それ以降は新島襄とした。英文で書かれた場合でも、表記は日本語で統一した。
- 一、展示資料の解説は、同志社社史資料センターが担当した。
- 一、パンフレットの編集は、キリスト教文化センター及び同志社社史資料センターが担当した。

展示テーマ

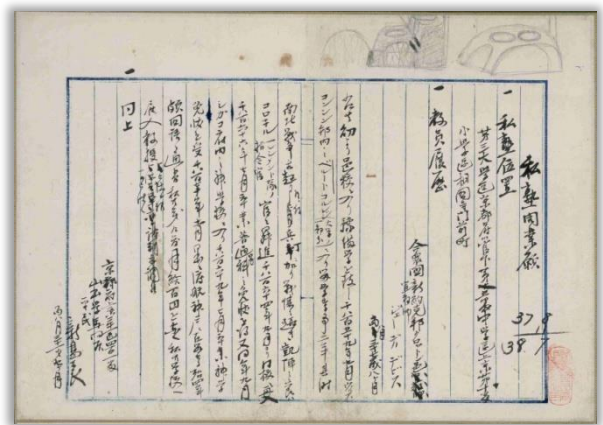
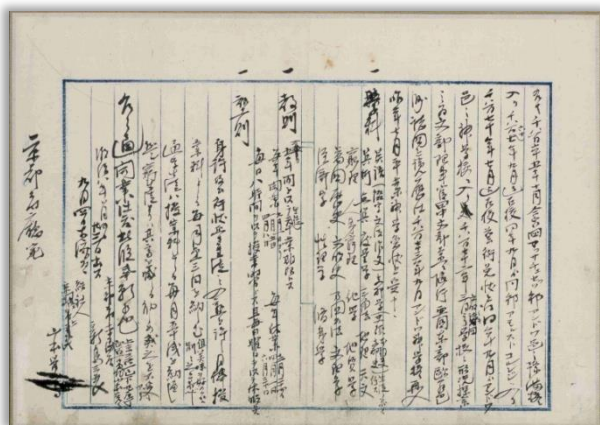
「同志社英学校開校」

同志社英学校は1875年（明治8）11月29日、今から148年前に京都御所の東隣、高松保実邸の半分を借用して開校しました。今出川キャンパスへの移転はその翌年です。当初は2人の教師と8人の生徒で始まったといわれますが、その後順調に生徒数を増やします。しかし、キリスト教主義学校であるがゆえに、学校運営の舵取りには十分に気を配る必要がありました。ここでは、そうした当時の状況をうかがい知れる資料を展示します。



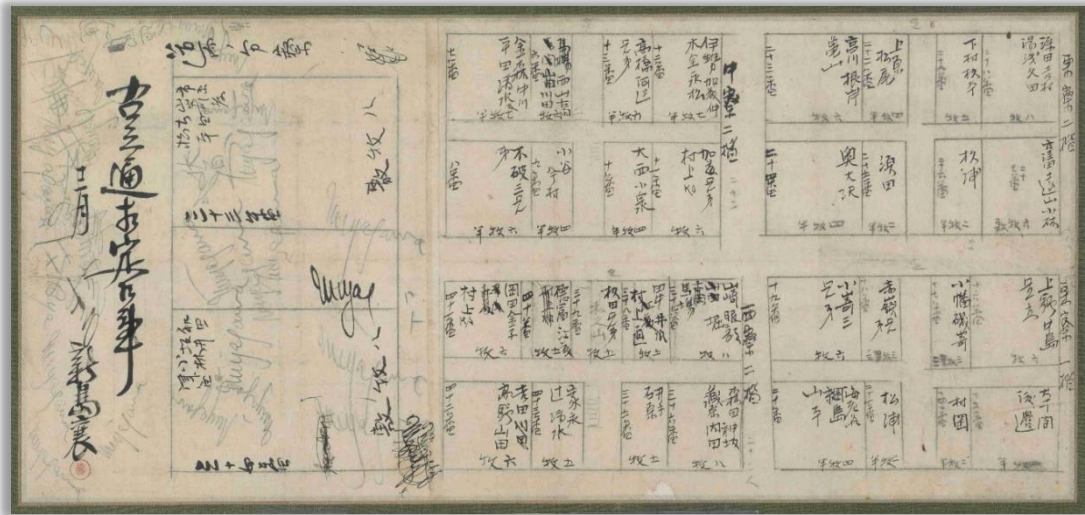
Rutland Weekly Herald, vol. 80, No. 42 (複製) 1874年10月15日発行 1部
60.5×45.5cm

この新聞は、アメリカ合衆国ヴァーモント州にあるラットランドで発行された地元紙(1874年10月15日発行)です。同地で開催されたアメリカン・ボード第65回年次大会での新島襄に関する記事が掲載されています。新島はこの大会の最終日(同年10月9日)に日本に向かう宣教師の一人として挨拶の壇上に立ち、そこで日本にキリスト教主義の学校を設立したいと聴衆に訴えかけたといわれます。新島の呼びかけに応じて約束された募金額は、約5,000ドルであったといわれます。



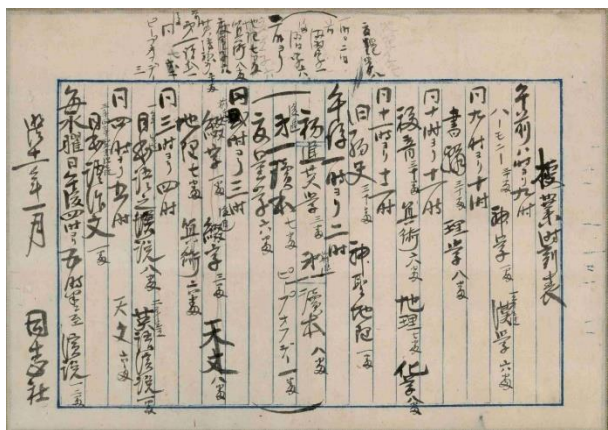
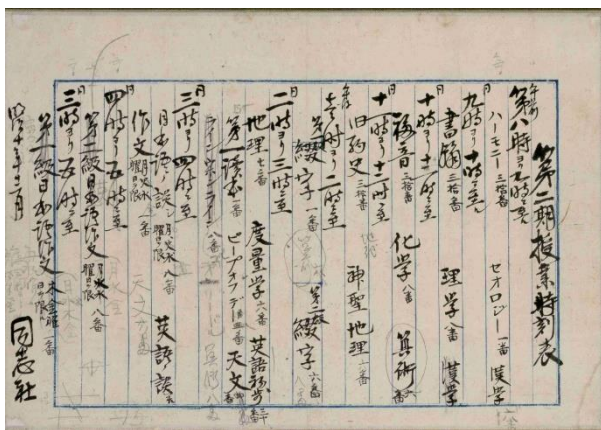
草稿「私塾開業願」(複製) 1875年8月4日 1巻 本紙25.7×35.8cm

京都府へ提出した書類の草稿(1875年8月4日付)です。教員となるJ.D.デイヴィスと新島の経歴、実施予定の学科(教科)、現在の学則にあたる教則と塾則がまとめられています。同志社は開校時からキリスト教主義の学校ですが、開校前に京都府へ提出したこの資料には、キリスト教に関する学科がほとんど挙げられていません。新島が、同じく開校前に聖書を学校で教えないという誓詞を京都府に提出したと関係があるかもしれません。いずれにせよ、この草稿をもとにした正式な書類により、新島は京都府から私塾開設の認可を得ることになります。



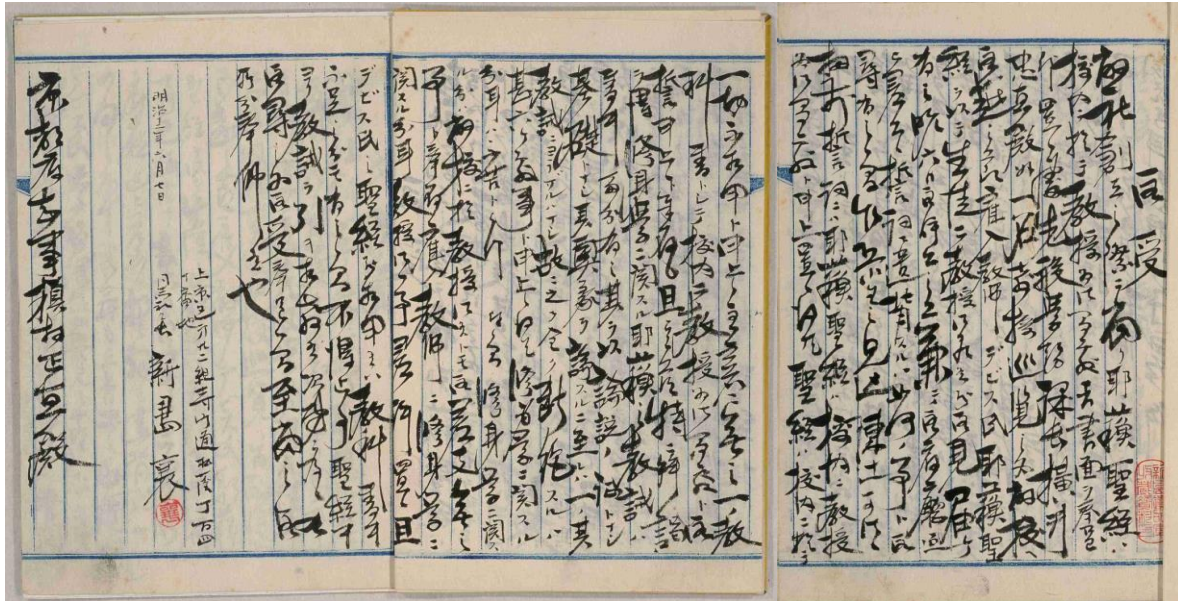
寄宿舍部屋割図 (複製) 1870年代後半 1巻 24.5×53.2cm

同志社英学校開校後の間もない時期(1870年代後半)に作成された寮の部屋割図、もしくはその案と考えられます。当時同志社に通う生徒は京都市内に親類が住む場合を除き、原則的に入寮することになっていました。開校当初の生徒数は8人といわれますが、開校3年後には在籍者が105人に増加しています。この部屋割図にも示されているように、在校生の増加に伴い、最初に建築された第一寮と第二寮以外にも寮が新設されました。



草稿「授業時間割」(複製) 1877年12月、1878年1月 1巻 25.5×37cm

開校3年目2学期(学年は秋始まり)の時間割に関する2つの草稿です。授業時間は午前8時から午後5時までの8時間(昼1時間休憩)で、漢学、算術、理学、綴方など、文理を問わずなるべく幅広く学ぶよう構成されています。また、神学、福音などに加え、キリスト教関連の副読本である『Peep of day』も使用されるなど、開校前の京都府への「私塾開業願」の草稿には見られなかった、キリスト教主義学校としての特色を見出せます。その他、日本語や英語での演説、英作文の授業が実施され、プレゼンテーション能力の育成も重視されていたことがわかります。



御受 (複製) 1879年6月7日 1冊 18×25.4cm

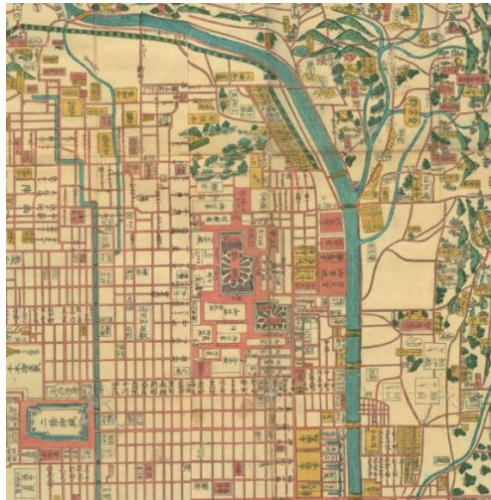
京都府からの疑義に答えた新島の回答書の草稿 (1879年 (明治12) 6月7日付) です。その疑義の内容とは、授業でデイヴィスが聖書を用いたことが、新島が京都府に提出した、校内で聖書を教えないとした誓詞に違反しているというものでした。これに対して新島は、絶対に聖書を使わないとは明言していない、修身学では聖書を参照する必要があり、参考図書として利用しただけであると弁明しています。こうした京都府の疑義は、当時同志社に向けられていた世間の見方を示す一事例と考えられます。



版画「同志社女学校最初の専用校舎」(複製) 1883年7月 1枚 19.1×26.4cm

『同志社女学校規則』(1883年 (明治16) 7月発行) に付された、同志社女学校最初の専用校舎の版画です。1876年 (明治9) 10月、英学校開校の翌年にデイヴィス邸 (元柳原前光邸、現京都迎賓館あたり) で始められたのが女子塾です。今出川への移転は1878年 (明治11) でした。女学校では裁縫などの科目も教えられていましたが、人文科学や自然科学に関する科目が広く教えられていました。

<幕末の今出川周辺>



「文久改正新增細見京絵図大全」部分 国立国会図書館デジタルコレクションより借用

現在の今出川キャンパスは、幕末には薩摩藩邸や公家屋敷が並ぶ場所でした。そして、その北には京都五山第2位の相国寺が、南には禁裏御所と公家屋敷が並ぶ、日本の伝統文化を象徴する空間（現在の京都御苑）でもあります。同志社はこのような特異な場所に1876年、キャンパスを構えることになりました。

同志社が開校する6年前、江戸から明治へ年号が変わる時に京都の町に大きな変化が起こります。象徴的な変化は1869年（明治2）の東京奠都（明治天皇の東京行幸）です。これにより禁裏御所とその周辺の公家屋敷の多くは空き家となり、かつての優雅さを失っていきます。また、京都の寺院も明治新政府の土地と人民の整理政策の影響を受け、弱体化していきます。そのような周囲の状況下でキリスト教主義学校として同志社はこの地に移りました。

<山本覚馬と八重>



山本覚馬肖像写真



新島八重肖像写真

新島が初めて京都に来たのは、同志社開校の7ヶ月前、1875年4月です。大阪での学校設立が難航する中での入洛でした。しかし、この時の訪問で新島は京都での学校設立のための有力な協力者に出会います。その人物が山本覚馬でした。覚馬は当時京都府政下で顧問格にあり、新島が京都府に提出した「私塾開業願」に連署した人物でもあります。また、新島は開校までのしばらくの間覚馬の自宅に寄寓しています。その時、伴侶となる女性に出会いました。それが覚馬の妹・八重です。

<開校当初の今出川キャンパス>



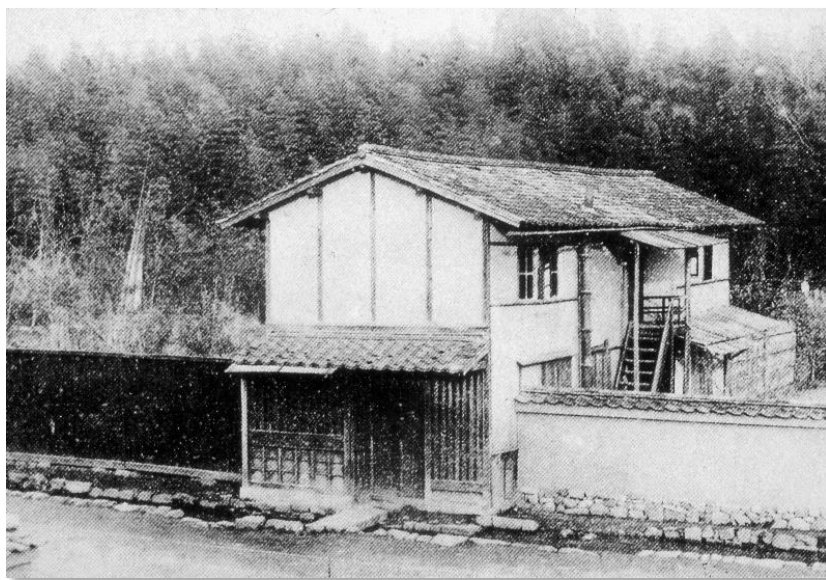
今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮



薩摩藩邸跡碑

同志社英学校最初の専用校舎は、木造の教室兼寮2棟と食堂で、在学生の多くは寄宿舍生でした。寺町通（現在の新島旧邸のある場所）の仮校舎から、今出川への移転は、開校翌年の1876年9月でした。この土地は、新島襄が1875年6月に、山本覚馬の力添えて購入した薩摩藩邸跡です。キリスト教禁教の高札撤去後も、キリスト教に対する反発が残る時代に、内裏（現在の京都御苑）の真北、京都五山第2位の相国寺の門前に校地を構えることになりました。

<三十番教室>



三十番教室

同志社開校に際して、キリスト教主義の学校に対する市民らの反発を恐れた京都府権知事榎村正直（1834-1896）は、学校で聖書を教えないことを開校の条件としました。これに対して新島は、校外での聖書講義を制限しないことを条件に、榎村の条件を受け入れます。その後、学校と大門町通を隔てた場所にあった廃屋（現アーモスト館の旧管理人棟あたりの場所）を新島が入手し、聖書講義の教室としました。この教室が三十番教室です。

<同志社英学校第1期卒業生写真>



同志社英学校第1期卒業生写真



初期の同志社英学校生徒

同志社英学校第1期卒業生は全員が熊本バンドでした。卒業後の彼らは同志社で教師をする者もいれば、伝道のために九州や関東に赴く者もあり、それぞれ活躍の場は異なりましたが、各分野で顕著な働きを残しました。また、卒業式で行われた卒業生の演説会では、宗教のみならず社会の諸問題との関係で設定された、幅広いテーマでの演説が日本語と英語で行われました。同志社では、草創期からキリスト教精神を基本とし、社会に貢献しうる素養と実行力を身に着けた人物の育成が実践されていました。

<同志社女学校の開校>



人力車にのる女性宣教師A. J. スタークウェザー (左) とH. F. パーミリー (右)



同志社女学校と二條家

同志社では、当時一般的でなかった女子教育が初期から実施されていました。発祥は1876年10月に始まった女子塾です。J. D. デイヴィスが借りていた邸宅（旧柳原前光邸、現在の京都迎賓館あたり）で女性宣教師A. J. スタークウェザーがはじめました。女子塾は、1877年9月、同志社女学校と改称し、翌年今出川に移転します。移転間もない時期に撮影されたと考えられる写真には、女学校校舎に隣接して二條家の屋敷があることが確認できます。

<チャペル・アワー (キリスト教文化センター主催) >

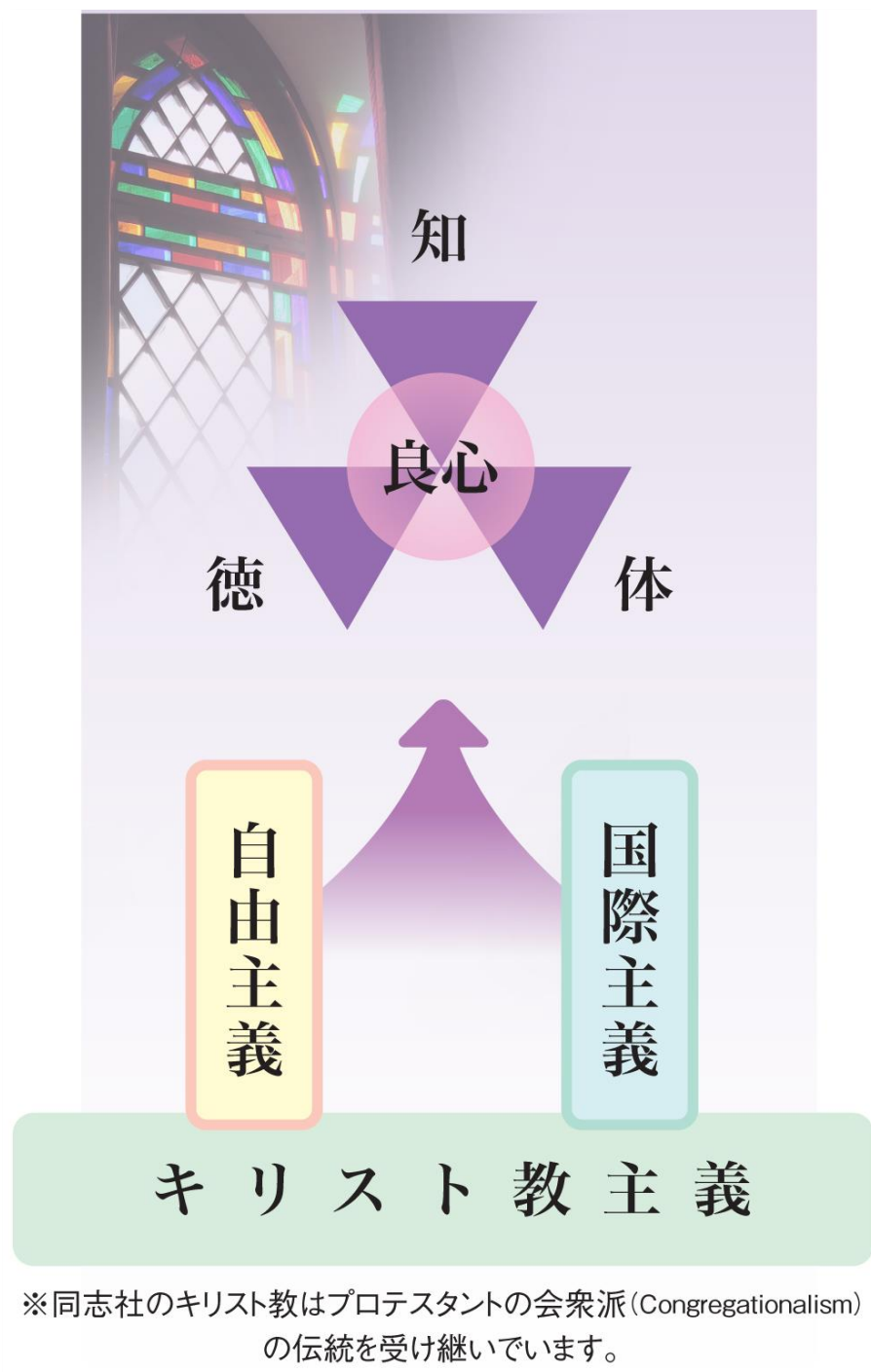


京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂

開講期間中、両校地の礼拝堂においてそれぞれ週3回行われており、現代に生きる人間の諸問題をめぐって、本学教職員や教会の牧師、そして様々な分野で活躍されている方々に奨励していただいています。チャペル・アワーは礼拝形式であり、オルガンの奏楽で始まり、讃美歌斉唱、聖書朗読、祈祷、奨励者によるメッセージ、祝福などが行われています。クリスチャンでない方々にも親しみが持てるように、日々の暮らしにまつわる話などを交えながら、イエス・キリストや聖書のことばをわかりやすく語っていただけます。また、教職員の場合には、同志社におけるご自身の学びや体験をお話されることもあります。学生の皆さんだけでなく、地域の方々も参加されていますので、ぜひ気軽にお越し下さい。

	今出川校地	京田辺校地
火曜日	17:30~18:10	ランチタイム (12:35~13:00)
水曜日	10:45~11:30	
金曜日	ランチタイム (12:35~13:00)	

<同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義>



キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関図

同志社の支柱である自由主義と国際主義を基底で支えるものは、キリスト教主義です。これは同志社独自の校風を形成する最大の要素となっています。新島は、学生一人ひとりを、神がつくられた「人格」として最大限に尊重しました。以来、「人ひとりは大切なり」が大事な校風として守られてきました。その結果、聖書にあるように、隣人を尊重し、他者に奉仕する「地の塩、世の光」とも言うべき個性豊かな多くの卒業生を、いろいろな分野へ開拓者として送りこんできました。そうした営みは、これからも永続します。

<同志社教育のバックボーンとなるキリスト教主義>

キリスト教に基づいた「良心」に従って生き、
その「良心」の中で「自由」を行使する



創立者 新島襄

同志社教育のバックボーンとなる キリスト教主義

1864年6月14日、愛国心に燃えて脱国した新島襄は、欧米の知識を得たいという思いに加えて、神の存在を知り、もつと聖書を学びたいという志ももっていました。新島は日本を脱国する前、20歳のころには漢文で書かれた聖書を既に読んでいたのです。

およそ10年に及ぶアメリカでの生活を終え、アメリカン・ボードの宣教師となって日本に戻った新島は、京都に同志社英学校を設立します。新島の理想の教育は、「知徳併行による人物の養成」でした。「信仰」と「學術」を車の両輪のように考えていました。知識に偏らない、徳育も併せもつ教育であり、その徳育の基本がキリスト教でした。

そして、新島は、他者に奉仕し、他者に「与える」精神性（「受けるよりは与えるほうが幸いである」―使徒言行録20章35節）を有する人物を同志社から輩出することを望みました。つまり、利己心ではなく、利他心（良心）をもつ青年です。それを端的に表現したのが、「良心碑」に彫られている「良心之全身ニ充滿シタル丈夫オトコノ起リ来ラシム事ヲ」です。

皆さんが、学生生活を通して同志社大学のキリスト教主義について考え、良心を育み、卒業後、社会のそれぞれの場所でその力を発揮することができるよう願っています。

キリスト教文化センター所長

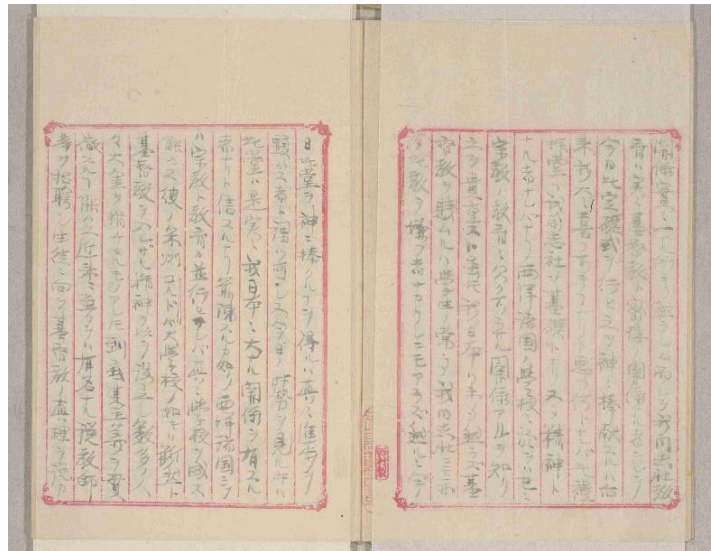
展示テーマ

「新島襄と同志社」

新島は日本でキリスト教主義の学校を設立したいという考えを持って帰国しました。ただし、新島はキリスト教主義を重んじながらも、生徒の学びをどのように広げ、深めていくかも同時に考えていました。ここでは、学問と宗教の関係性とその広がりをうかがい知れる資料を展示します。

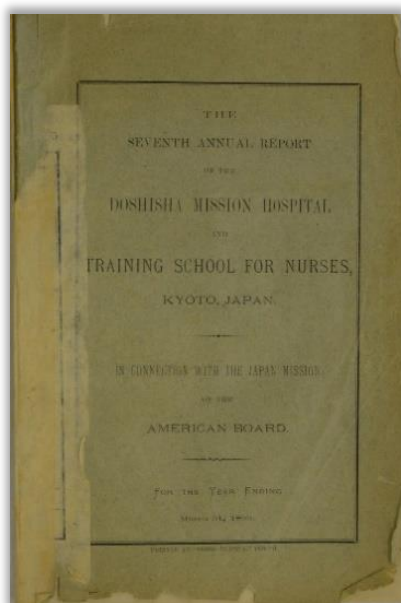
同志社外国人教師一覽 (複製) 1870年代後半 1枚 28×39.3cm

同志社に在籍した一部の宣教師の個人情報が集められた一覧表です。1870年代後半に作成されたと考えられます。英学校及び女学校の開校時には日本人教員も在籍していましたが、アメリカン・ボードが派遣した外国人宣教師も教師として多数在籍していました。とりわけ男性宣教師は、当時のアメリカ社会のトップエリートで、彼らが在籍していたことが同志社の学問性の高さをうかがわせます。また、宣教師の存在が、ボードから同志社へのマンパワーの提供を意味しています。



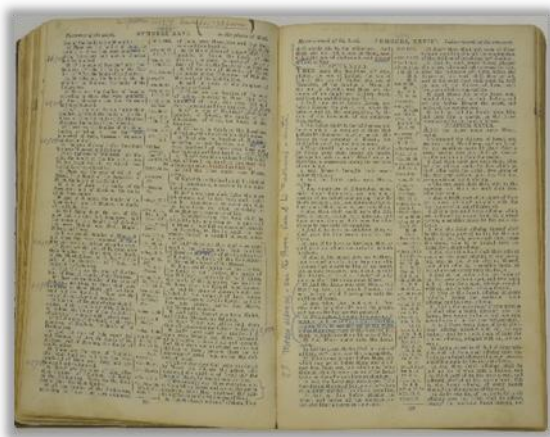
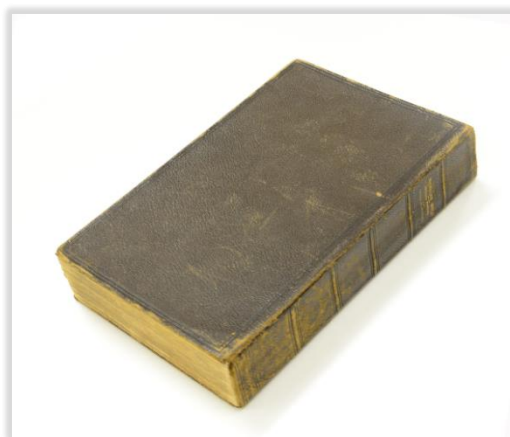
筆記メモ「同志社創立十周年記念演説」(複製) 1885年12月18日 1冊 17×12cm

当時の生徒(広津友信)による新島の演説記録(1885年(明治18)12月18日)です。この時挙行された同志社礼拝堂定礎式で、新島は礼拝堂建設の意味について、宗教と教育の密接な関係を示すものと述べました。そして、「礼拝堂は我が同志社の基礎となり、また精神となる者なればなり」と、同志社における礼拝堂の存在意義を語り、同時に日本においても重要な役割を果たす建物であると述べています。



The Seventh Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses, 1893 (複製) 1893年 1冊 22.5×14.5cm

この資料は同志社病院と京都看病婦学校の第7次年報（1893年）です。新島は、専門教育の実施も期して学校運営に尽力していました。長期的に関わったのは大学設立運動ですが、先に1886年（明治19）に実現したのが同志社病院と京都看病婦学校でした。当初は病院ではなく医学校設立を予定していましたが、資金集めに苦慮した結果、設立はかないませんでした。これらの開設・開校の式典にて、当時の京都府知事北垣国道は祝辞で「この学校と病院が実施する貴い仕事は、私たち府民にすばらしい恩恵をもたらすであろう」と述べています。



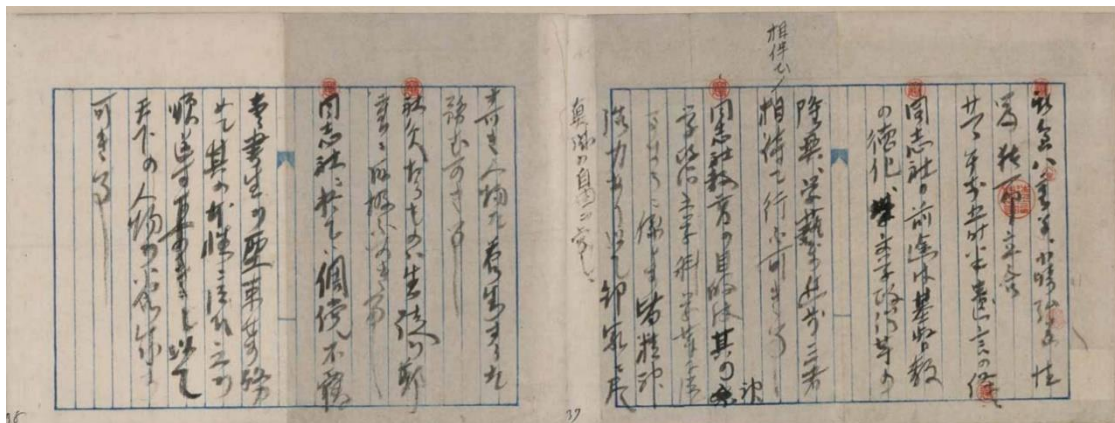
新島襄旧蔵聖書 (複製) 年不詳 1冊 21×14cm

新島がアメリカに到着した翌年に、ハーディーが後見人を務めていた J.M. シアーズ (Joshua Montgomery Sears, 1854~1905) より贈られた英訳聖書です。手書きのメモや印は、新島のキリスト教に対する知的好奇心や信仰の深化過程を示しています。同志社は新島の在世中から自然科学や社会科学の専門学校を次々と開校させますが、その大前提としてキリスト教を徳育の基本としていました。この聖書は、同志社のキリスト教主義の歴史と重要性を示す資料のひとつです。



自責の杖 (複製) 明治時代 3片 最大60cm

打掌で折れたとされる新島の杖です。1880年(明治13)4月、当時2年生の上級組と下級組の合併決議を発端とする学内ストライキが発生し、学内が混乱しました。新島は同月13日の朝礼の席で、一連の騒動は校長である自分の責任である、として自らの掌を杖で打ちつけました。この衝撃的な事件を物語る杖は、新島のキリスト教信仰に係わる贖罪感、そして教育観を伝える象徴として、これまで受け継がれています。



新島八重子、小崎弘道、徳富猪一郎立合廿一日午前五時半遺言の条々

同志社の前途は基督教の徳化、文学政治等の隆興、学芸の進歩三者相伴ひ相待て行ふ可き事

同志社教育の目的は其の神学政治文学科学等に従事する二係らす皆精神活力あり真誠の自由ヲ愛し以て邦家ニ尽す可き人物を養成するを務む可き事

社員たるものハ生徒ヲ鄭重ニ取扱ふ可き事

同志社ニ於てハ個儻不羈なる書生ヲ壓束せず務めて其の本性ニ従ひ之ヲ順導し以て天下の人物ヲ養成す可き事

※押印は省略

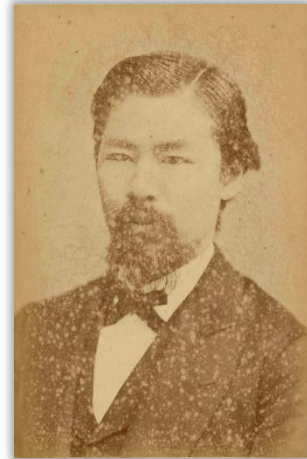
新島襄遺言 (複製、部分) 1890年1月21日 1巻 24.5×200cm

新島が永眠する2日前、1890年(明治23)1月21日、妻の八重、教え子の小崎弘道と徳富猪一郎が立ち会ったためられた遺言です。同志社に対しては、自制し、真摯に教育活動や学校運営を行うこと、生徒には丁重に接し、個性を活かしながら導くことなどが書かれています。

<アンドーヴァー神学校時代の新島襄>



アンドーヴァー神学校時代の新島襄、学友、スタッフの集合写真



新島襄（アンドーヴァー神学校在学時）

新島はアーモスト大学卒業後、ハーディーとも相談の上、アンドーヴァー神学校で学ぶことを決意し、1870年（明治3）9月特別コースに入学しました。神学校では、ニュー・イングランド神学を中心に、牧師・宣教師にふさわしい知識と教養を身につけるべく勉学に励みました。また、在学中の1872年（明治5）には岩倉使節団から通訳を委嘱されて文部理事官田中不二麿に随行し、田中とともに欧米8カ国の教育施設や病院、新聞社などを見学しました。西洋の教育を間近で見た新島は、欧米における人間教育の価値とキリスト教感化の重要性を実感し、その後の自身の教育観を形成していきました。

<明治期の日本キリスト教界のリーダーたちとの交流>



第3回全国基督教信徒大親睦会集合写真 1883年

1878年（明治11）から1885年にかけて、4度、全国のクリスチャンを対象とした親睦会が開催されました。新島は少なくとも2回目と3回目に参加しています。4回目の時には海外から親睦会宛に書状を送っています。

同志社のキリスト教はプロテスタントの会衆派（組合派）ですが、この親睦会には教派を越えて人々が集い、親睦を深め、情報を交換していました。新島も他教派のリーダーたちと積極的に交流していたことが窺われます。

<同志社礼拝堂（チャペル）>



竣工当時の同志社礼拝堂



竣工当時の同志社礼拝堂内部

礼拝堂が完成する半年前の1885年12月18日、同志社礼拝堂定礎式が挙行されました。この時新島は「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者」と述べ、礼拝堂が同志社の象徴的存在であることを示しました。更に、「教育ノ基本ハ宗教ニアリ」とも訴え、キリスト教が人格教育の基礎であり、あらゆる教養や信仰の基本であるとも述べています。現在も礼拝堂は宗教教育の中心となる場を担っています。

<同志社書籍館（現・有終館）>



大正時代の書籍館



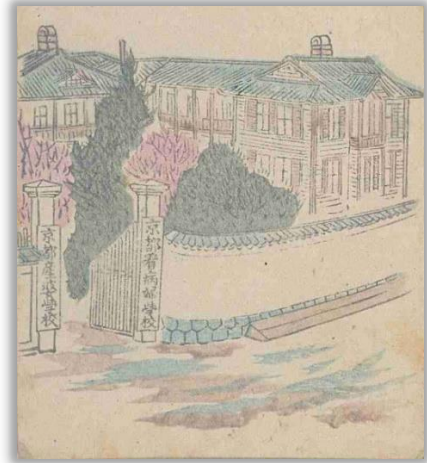
明治時代の書籍館内部

1887年（明治20）に竣工した同志社の初代図書館。内部には書庫と閲覧室に加えて、自然科学の実験室、そして新島の執務室があったと言われます。新島は学校における図書館の重要性について、しばしば演説や手紙の中で触れました。特に同志社大学設立運動時の演説草稿には、参考事例として海外の大学図書館（主に蔵書数）を頻繁に挙げています。新島は豊富な蔵書や施設の充実が、学校の高い学問水準の実証と考えていたようです。

<同志社病院・京都看病婦学校>



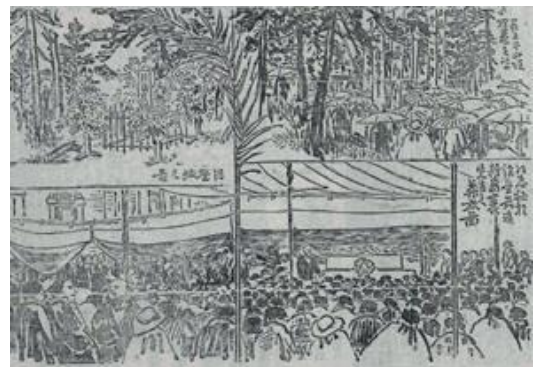
京都看病婦学校校舎



封筒(部分) 京都看病婦学校絵入

1887年開院・開校。現在のKBS京都の場所(上京区烏丸上長者町)にありました。新島は当初医学校の開設を目指し、協力者であるJ.C.ベリーとともに教派を越えて資金集めに奔走していました。しかし、諸事情から開校資金の目処が立たず、最終的には病院の開院と看病婦学校の開校に落ち着きました。特に、看病婦学校は同志社開校から12年目にして開校した、同志社初の自然科学系専門教育機関でした。

<新島襄の永眠>



久保田米穂「故新島先生長逝状景画四葉」のうち臨終図 「国民新聞第4号・葬儀概況」部分(葬式図・築城図、埋葬図)

同志社の持続可能な発展のために尽力してきた新島は、1889年(明治22)11月関東で体調を崩し、翌月より神奈川県大磯にあった百足屋で病氣療養に入りました。しかし、療養の甲斐なく、1890年1月23日、駆けつけた妻・八重や教え子の徳富猪一郎らに見守られて永眠しました。46歳でした。同志社の運営に尽力したのは約15年です。

その後、新島の亡骸は京都に戻され、今出川キャンパスの同志社礼拝堂前で葬儀が行われました。4,000人が参列したといわれます。その後、生徒らが棺を担ぎ、若王子山頂(現在の同志社墓地)に埋葬されました。

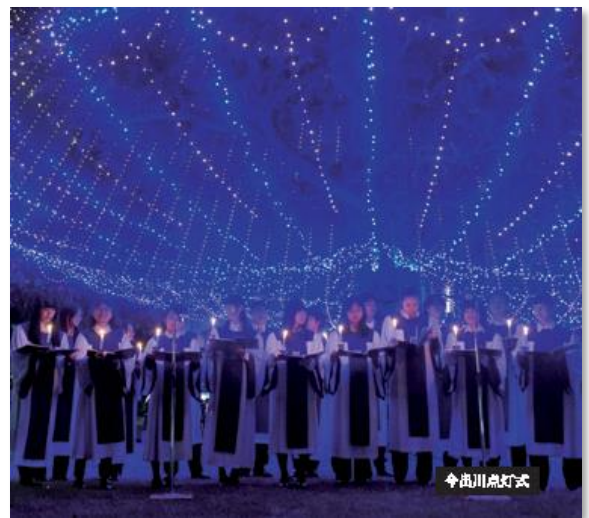
<京田辺キャンパスのクリスマス・ツリーと

クリスマス・イルミネーション点灯式>



京田辺クリスマス・ツリー

京田辺クリスマス・ツリー



今出川点灯式

今出川点灯式



京田辺点灯式

京田辺点灯式

京田辺キャンパスではローム記念館前に植えられたモミノキがクリスマス・ツリーの役割を担います。11月下旬から12月初旬に、毎年恒例のクリスマス・イルミネーション点灯式が両キャンパスで行われ、同志社学生聖歌隊による讃美歌が儼かな雰囲気をつくるなか、点灯の瞬間には集まった多くの学生や市民から大きな歓声が上がります。また、点灯式の参加者には廣垣俊樹理工学部教授のゼミ及び環境保全・実験実習支援センターの協力を得て、京田辺キャンパスで伐採した竹で作った同志社徽章入りの燭台を参加者にプレゼントしています。

<同志社京田辺クリスマス燭火讃美礼拝 (キリスト教文化センター主催) >



キャンドル点灯



聖書物語劇



聖歌隊

同志社新島記念講堂で毎年12月第2土曜日に行われる同志社京田辺クリスマス燭火讃美礼拝は、地域の方々と同志社の学生や教職員が、ともに作りあげる大切な行事となっています。パイプオルガンの荘厳な音色による前奏から始まり、讃美歌合唱、開会祈祷、聖書物語劇と続きます。劇中では、京田辺市民合唱団、田辺少年少女合唱団コスモス及び同志社学生聖歌隊による合唱やハンドベル・クワイアによる演奏が行われ、その後、牧師による説教と祝福などが行われます。

<クリスマス・イブ礼拝>



クリスマス・イブ礼拝（今出川校地）



クリスマス・イブ礼拝（京田辺校地）

キリスト教文化センターではクリスマス・イブ礼拝を両校地で行っています。今出川校地では、同志社教会との共催で同志社礼拝堂において2013年から実施しています。京田辺校地では、同志社京田辺会堂が瀨堂された2015年に初めてのクリスマス・イブ礼拝を行いました。大学のキャンパスで迎えるクリスマスとして、学生、教職員だけではなく広く地域の方々も集って、讃美歌を歌い、聖書のことばに耳をかたむけ、イエス・キリストの降誕をともに喜び、祝っています。

資料リスト (全て複製)

資料名	作者・著編者	年代	法量 (cm)	頁数	所蔵先
展示テーマ「同志社英学校開校」					
Rutland Weekly Herald, vol. 80, No. 42	-	1874年10月15日	60.5×45.5	1部	同志社社史資料センター
草稿「私塾開業願」	新島襄	1875年8月4日	25.7×35.8	1巻	同志社社史資料センター
寄宿舎部屋割図	新島襄	1870年代後半	24.5×53.2	1巻	同志社社史資料センター
草稿「授業時間割」	-	1877年12月、 1878年1月	25.5×37	1巻	同志社社史資料センター
御受	新島襄	1879年6月7日	18×25.4	1冊	同志社社史資料センター
版画「同志社女学校最初の専用校舎」 『同志社女学校規則』(1883年7月刊) 所収	同志社女学校	1883年7月	19.1×26.4	1枚	同志社社史資料センター
展示テーマ「新島襄と同志社」					
同志社外国人教師一覧	-	1870年代後半	28×39.3	1枚	同志社社史資料センター
筆記メモ「同志社創立十周年記念演説」	広津友信	1885年12月18日	17×12	1冊	同志社社史資料センター
The Seventh Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses, 1893	-	1893年	22.5×14.5	1冊	同志社社史資料センター
新島襄旧蔵聖書	-	年不詳	21×14	1冊	同志社社史資料センター
自責の杖	-	明治時代	最大60	3片	同志社社史資料センター
新島襄遺言	徳富猪一郎	1890年1月21日	24.5×200	1巻	同志社社史資料センター

使用写真リスト

ポスターパネルタイトル	写真・画像	年代	所蔵先
展示テーマ「同志社英学校開校」			
幕末の今出川周辺	「文久改正新增細見京絵図大全」部分	1863年	国立国会図書館 デジタルコレクション
山本覚馬と八重	山本覚馬肖像写真 新島八重肖像写真	明治時代 明治時代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
開校当初の今出川キャンパス	今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮 薩摩藩邸跡碑	1870年代後半 2014年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
三十番教室	三十番教室	明治時代	同志社社史資料センター
同志社英学校第1期卒業生写真	同志社英学校第1期卒業生写真 初期の同志社英学校生徒	1879年 1877年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社女学校の開校	人力車にのる女性宣教師A. J. スター クウェザー(左)とH. F. パーミリー (右) 同志社女学校と二條家	明治時代 明治時代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
チャペル・アワー	京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂 キリスト教主義と教育理念の関係を表 す相関図(キリスト教文化センター発 行『基督教主義を以って徳育の基本と 為せり-同志社大学とキリスト教主義- 』所収)	2018年	キリスト教文化センター
同志社の精神的な基底をなす キリスト教主義	キリスト教文化センター発行『基督教 主義を以って徳育の基本と為せり-同 志社大学とキリスト教主義-』所収	2017年	キリスト教文化センター
同志社教育のバックボーンとなるキ リスト教主義	キリスト教文化センター発行『基督教 主義を以って徳育の基本と為せり-同 志社大学とキリスト教主義-』所収	2018年	キリスト教文化センター
展示テーマ「新島襄と同志社」			
アンドーヴァー神学校時代の 新島襄	アンドーヴァー神学校時代の 新島襄、学友、スタッフの集合写真 新島襄(アンドーヴァー神学校在学 時)	1870年代前半 1870年代前半	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
明治期の日本キリスト教界のリー ダーたちとの交流	第3回全国基督教徒大親睦会集合写 真	1883年	同志社社史資料センター
同志社礼拝堂(チャペル)	竣工当時の同志社礼拝堂 竣工当時の同志社礼拝堂内部	1880年代 1880年代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社書籍館(現・有終館)	大正時代の書籍館 明治時代の書籍館内部	大正時代 明治時代	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
同志社病院・京都看病婦学校	京都看病婦学校校舎 封筒(部分)京都看病婦学校絵入 久保田米僊「故新島先生長逝状景画四 葉」のうち臨終図	1893年 年不詳 1890年	同志社社史資料センター 同志社社史資料センター 同志社社史資料センター
新島襄の永眠	「国民新聞第4号・葬儀概況」部分 (葬式図:築域図、埋葬図)	1890年	同志社社史資料センター
京田辺キャンパスのクリスマス・ツ リーとクリスマス・イルミネーショ ン点灯式	京田辺クリスマス・ツリー 今出川点灯式 京田辺点灯式 キャンドル点灯	2013年 2014年 2014年 2014年	キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター キリスト教文化センター
同志社京田辺クリスマス燭火讚美礼 拝	聖書物語劇 聖歌隊	2014年 2014年	キリスト教文化センター キリスト教文化センター
クリスマス・イブ礼拝	クリスマス・イブ礼拝(今出川校地) クリスマス・イブ礼拝(京田辺校地)	2015年 2015年	キリスト教文化センター キリスト教文化センター



同志社京田辺会堂光館 (HIKARI-KAN) ラウンジ展示第18期展

「新島襄と同志社—建学の精神・創立者の夢—」

編集：同志社大学同志社社史資料センター

発行：同志社大学キリスト教文化センター

発行日：2023年10月2日

©Doshisha Archives Center and Center for Christian Culture